

## 文学博士桂壽一君の「スピノザの哲學」に対する授

## 賞審査要旨

スピノザの哲學は幾何学的に整然とした組織を有し且つ彼自身の高潔な人格の故に研究者の注意を引き、哲學史上最も興味深き人物として認められているが、少しく厳密に研究すると歴史的にも思想的にも問題点が多く、一見矛盾するかのようなまた解釈上困難な箇所もあり、少からず学徒の関心を蒐めている。本書の著者桂壽一君は多年近世哲學史を専攻し、その研究業績として昭和十九年には『デカルト哲學研究』、同二十三年には『デカルト哲學の發展』を發表し、デカルト及びその以後の哲學的問題の展開を説明したが、その成果に基いてスピノザ哲學の成立と發展とその思想内容の分析及び理解とを深く探究して、昭和三十一年九月本書を公刊した。本書は統一的なモノグラフィとして論述されたものであるが、著者の長い研究過程を示す重要な一段階として見られる。すなわち著者はスピノザの哲學の取扱つてゐる問題がデカルトに淵源することを前提してまずその思想を分解し、続いてその問題がゲーリックス及びマールブランシュにより代表される和蘭派と仏蘭西派との二大系統において如何に理解されたかを説明しようとしたのである。この發展過程は大体には既に認められていたことであるが、著者は和蘭派及び仏蘭西派のような従来余り注意されなかつた哲學者について研究を加え、更にデカルトとスピノザとを比較してその關係を明かにすること

を努めたのは適切な態度である。

本書『スピノザの哲学』について見ると章を分つこと十、その第一章は序説であつて、スピノザの哲学史的位置を述べ、また全著作の年代を考証してその思想的発達に関する資料を整理している。殊に彼の著作の多くが死後遺著として出版され、執筆年代の明かでないものが多く、その考証には少からず苦心を要したと思われる。

第二章はスピノザの比較的初期の書と認められる和蘭語著作『神、人間及びその幸福についての短論文』(Korte Verhandelng van God, de Mensch en deszelfs Welstand)の研究である。著者は之を後年の主著『エチカ』と比較して「神即自然」の思想が既にならぬ中に確立されているのを認めているが、ここではまだ神の概念に重点が置かれ、それが彼のいう「自然」に一種の全体性実質性を与える機因となり、後の無限様態の思想に到る出発点となつた過程を明かにしている。この章の終りに論及された『二つの対話』及び『幾何学的附録』の研究も『エチカ』の教説を素朴な形において予示していることを指摘し、興味がある。

以上の『短論文』に続くスピノザの哲学的著作は、死後遺著の一部として公けにされた『知性改善論』(Tractatus de intellectus emendatione)であるが、著者は之を、スピノザが一六六一年前後に哲學的方法論の自覚に達した頃の著書であると解し、第三章「スピノザ哲學の方法」と題してこの書を研究しその転機を論述する。従つて著者はこの書を、単に我々の人間認識の理性化乃至幾何學的方法への改善を説くものとする従来の通説をすてて、知性その者の純化向上即ち人間の知性から「無限知性」への發展を意図するものとなし、そしてその段階に達したときに主著『エチカ』の幾何學的論証が可能とされるに至つたと推定する。しかしこの解釈が許されるとすれば、我々の知性を無限知性の中

に吸収させることとなるので、彼の哲学そのものについてもその方法についても新しい理解が必要とされ、従つて哲学は絶対者の無限知性による自己展開として、幾何学的方法は単なる叙述形式ではなく、その自己展開に固有な形式として解されなければならない。この点も著者独自の解釈として注意さるべき創見として認められる。

第四章以下は主著『エチカ』(Ethica)の研究である。ここでも著者は平板な解説紹介に留まらずに、スピノザ哲学に固有な屬性の概念の解釈に重点を置き、『短論文』及び『改善論』との關係を明かにして彼の思想的發展の過程を見、エルドマンとクローノー・フィツシャー以来の論争を批評しつつ、問題の核心が知性の解釈に存することを指摘し、この知性を無限知性と解することにより、存在者として即自的な神が向自的になつた場合が屬性であり、知性はその媒介をなすものとなす。この解釈は、従来屬性を实体からの實在論的な流出または産出力となし、或いは実体の「我々」に取つて」の姿と見ようとする諸見解に対して、注意すべき新しい観点を示したものと言える。著者はこの屬性についての批判からその性質特に「延長」の概念を介して様態の思想に進み、次章にその解決を試みようとする。

第五章は「無限様態」の研究で、本書前半部の中核的部分である。前章において著者は屬性の無限性を説いたが、もし然りとすれば様態の多様性との間に距りを生じ、之に説明を与えなければならぬ。著者によれば世界の事物現象は様態として規定されるが、それは専ら有限様態であり、無限様態についてはスピノザ自身の記述も甚だ乏しく之を詳かにすることが困難であるが、著者は非常な苦心をもつて著書や書簡その他の断片的な資料を探究し、スピノザの思想發展の全過程を点検して独自の解釈を加え、その哲学体系の特質を認識しようとした。それによると無限様態には延長と思惟との二つがあり、後年には更に第一種、第二種の別も認められた。著者は、この延長における無限様態

として例示された「運動及び静止」を彼の自然学的原理を指すものとなし、第二種様態としての「宇宙の相」と共に、之をデカルトの自然学と対照して、スピノザのいう自然が大なる「個体」として一種の全体性完結性によつて特徴付けられるのを見た。之は従来専ら機械的な必然からのみ解せられたスピノザの自然観に新しい面を見出したものと言えらるであらう。

次に思惟における無限様態については、従来「絶体無限知性」とか「神の観念」などと表現されたがその意義は明瞭でなく、ただ延長の場合と平行的に解されるのが常であつた。著者はそれらの解釈を詳細に検討した後に、新しい角度から考察されなければならないことを知り、スピノザ自身の叙述中に、延長の場合よりも思惟の場合に優位を与えている観点を認め、之を手懸りとして前記第三章以来の無限知性に外ならないことを推定し、「神即自然」の自己展開の媒介者たる意味をもつとなした。かくて「無限知性」の思想が著者によるとスピノザ哲学最後の帰着点となるので、著者は之を重視して哲学的考察を加えている。そこには資料による客観的論証が弱いかのような感もなきはないが、探究し得られる限りの資料をよく利用して従来未開拓の分野に光明を投じた功績は認められなければならない。

以上においてスピノザ哲学の形而上学的部門を終り、次に個物世界、特に人間に關する部門に移る。その際著者はスピノザの思想の年代的発展に留意し、就中認識、感情及び道德に關しては、『短論文』における所説にまで遡つて探究すると共に、之等の諸部門の支柱を「自存力」に求め、この自存力の純化によつて諸部門の展開を説明しているのが注意される。

まず第六章「個物の世界」には、個物世界を特徴付ける有限性消極性を挙げると共に、その間に之を支える「自存

力」、すなわち「自己」を維持する、もしくはその存在に固執する傾向」の存することを認め、人間論的哲学においても之が基礎概念となることを主張し、次章以下に之を論証しようとする。之により本章はその原理論をなしている。

第七章は「精神と認識」と題し、スピノザに特有な物心平行論に伴う知識論的性格を説明し、精神の特に人間論的な作用としての認識の考察に集中する。その際著者は『短論文』『改善論』及び『エチカ』その他の諸著によつて詳細に彼の所説を比較検討し、初期における最高認識の素朴な神秘主義が漸次合理化されて『エチカ』の直覚知に達した点、並びに初期の純粹に受動的な認識観から脱皮して、認識者すなわち個物の積極性を認めようとする傾向に進んだ点を指摘する。そしてこの認識思想の発展は、スピノザの体系の各部分の整備並びに成熟と密接な関係のあることを認め、特に直覚知の最終形態が彼の完成した道德思想に至る不可欠の条件として役立つことを示して、終章への準備としている。

次に第八章「感情と人間生活」は、人間の精神生活状態として特に重要な感情の問題を取りあげる。之は近世初期の哲学者により最も熱心に論究された問題で、著者はスコラ哲学及びデカルト等の感情論と対比してスピノザの所説の特質を探究し、『短論文』の感情論から『エチカ』の自存力を原理とする体系的論述にまで発展した経路を明かにし、之に関連する諸問題にも触れている。之等の諸問題は動もすればスピノザ哲学の中心とは関わり薄い部門として軽視され勝ちであるが、著者はこれが政治及び道德の教説に具体性実践性を与えるものとして深い関心をよせ、特にスピノザの思想的発展を明かにするために資料の検討に力を尽しているのは、哲學史的研究に取つて意義あるものと言え

終りに第九章及び第十章に「政治思想」と「道德の問題」とを論ずる。まず第九章には当時の和蘭の政治的及び宗教的情勢を概説し、その背景の下に著作された『神学政治論』及び『国家論』の両著を検討し、前者が理論的考察に傾いているのに対し、後者は實際問題の論述である差別を注意し、彼の思想に關連を持つホッブスの自然法の觀念との差異を指摘する。もちろん彼も理性を、人間の社会的結合もしくは國家の成立に取つて不可欠の原理とするが、その際の理性は自然に対して他者ではなく、むしろ「自然権の理性化」として自然の中に根柢を有しそこから発したものと解する。しかもその自然権というのも結局は「自存力」に歸するので、彼の立場は個体性の否定ではなく、むしろその擴張と見做されることを得、且つ単に量的ではなく質的な擴張すなわち理性化が彼の政治論の歸着するところであつたことを論証している。

かようにスピノザにおいて人間の政治的社会的生活の根柢が自存力によつて解明されたが、この觀點は更に道德的生活の理解においても貫徹され、そこから彼の道德説が神との融合一致に達する神秘主義思想に外ならないとする一般の通説が覆えられて、自己の知性を自覺する主体的道德の徹底化であるとの新しい解釈に導かれる。この觀點を論証するのが第十章「道德の問題」で、ここではまずデカルト以後の道德説を述べつつスピノザの思想を歴史的に位置付け、そこから自由意志の問題に対する彼の態度を明かにし、個体の自由の否定が必ずしも道德思想の否認を意味しないことを弁護する。之に続いて著者は『短論文』における道德思想を歴史的にはゲーリンクスの説と比較しつつ、他方では神の知的愛の教の出発点をそこに求め『エチカ』における思想への發展を跡付ける。それによると『短論文』では神の嘆美と神への従屬とが重視され従つて神秘主義的な神との合一の思想が主張されたが、後には感情対処の問題考察

を媒介として自存力の意義に重点を置く「神の知的愛」の思想に到達したとなす。しかも道德生活における感情及び感情対処の問題、殊に知的愛との関係は複雑な内容を包有するが、『エチカ』では自存力の概念を取りあげ、固有の精神が高揚されてその最高認識としての「直覚知」に達するときに之に伴う「喜悅」に知的愛の本質が見出され、之を通して神の永遠性に与かるところに、スピノザの思想の極致が発揮されることを力説する。そして本書はこの純化された自存力の主体的自覚を汎神論的体系の中に見、その意味での知的愛を説いた論述をもつて主部を終結し、最後の「結語」において繰返しスピノザ哲学を概括し、近世思想史上におけるその位置を再閲してそこから生ずる課題を諸他の哲学説と対照し、特に彼の主唱する自存力の概念を批判すると共に、また彼の体系に認められる不整合をも指摘し、その歴史的意義を示している。

要するに本書の著者は三十余年に亘り近世初期の哲学の根本資料による研究に従事していたが、その豊富な成果に基いてスピノザ哲学の成立と発展過程とを、各時期の著作その他の材料の精緻な分析解釈によつて探究し、従来解き得なかつた諸問題に解決を与え、哲学史学界に新しい光明を齎らしたところ多く、その歴史的観点に關してはなお残された問題がなくはないとしても、将来における完成の礎地を築き、その業績は顕著であると認められる。